

整風運動の研究：四好中隊運動の論理

中屋敷， 宏
筑紫女学園短期大学：助教授

<https://doi.org/10.15017/9813>

出版情報：中国文学論集. 4, pp.151-163, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



整風運動の研究

— 四好中隊運動の論理 —

「四好中隊運動」は一九六一年元旦の中国共産党中央軍事委員会の呼びかけを以て始る。この運動は軍隊であるから当然のこととして「全面的に部隊の戦闘力を高め^[1]」ことを目的としている。しかし人民解放軍にこのような運動によって戦闘力を強化しようという毛沢東路線が定着するまでには、長く激烈な党内闘争を経て、いくつかの問題を解決することが必要であった。「四好中隊運動」が開始されるまでには少くとも次の四つの問題について党内の意志統一が必要であったと考えられる。まず第一は軍隊の戦闘力とは何か、という問題である。彭德懷は現代戦の戦力は巨大な「人力と物力」とから構成されると考えたのでソ連軍をモデルとして装備の「近代化」組織の「正規化」を推進し、他方では大量の後備人員を確保するため徴兵制を実施したのであった。大衆動員、兵士の思想教育を比較的軽視するこのような彭德懷の戦闘力概念を現代戦においてもやはり、「単純な軍事観点^[3]」であり、ブルジョア思想の一種であると

中屋敷 宏

して否定することが、「四好中隊運動」の最初の出発点となっている。そして如何に物量と兵器の質を競う現代戦においても「戦争の勝敗は勿論双方の軍事、政治、経済、地理、戦争の性質、国際的援助などの条件によつてきまる^[4]」という毛沢東路線に復帰する必要があつたのである。がこの時点で党指導部が戦争の勝敗を決する戦闘力の中で特に重視したのは、兵士の精神状態であり、生々とした兵士の精神を生みだす政治工作であつた。林彪は「政治こそもつとも根本的なものであり、政治工作、思想工作を立派にやらなければ、その他のすべての工作は何一つ談ずることができない^[5]」と言っている。又範戈は「人と武器との結合では兵士の精神状態即ち思想政治状態が決定的作用をし、全体の戦争、戦争の発展及び戦争の勝負では軍隊へ政治的要素が決定的作用をする^[6]」と主張する。しかしながら次に問題になるのは、核戦争に於ても毛沢東路線のこの原則は貫徹するののかという問題である。核戦争をめぐるこの問題はフルシチョフの平和共存路線とからんで激烈に討論されたと思われる。だがこの問題に対する結論は毛沢東路線の原則は貫徹し、核戦争

に於ても人民解放軍は十分に戦える、という事であった。一九四五年八月毛沢東は既に原爆は戦争を解決することはできない⁽⁷⁾と言っているが、この思想を林彪は実際の戦闘の場面に適用発展させて次のように言うのである。

原子爆弾の砲弾を発射した後、敵に数十米に接近した時にはやはり人間の勇敢さにたより、人の高度の覚悟と犠牲精神にたよらねばならない。攻撃する時には陣地を占領してこそ勝利をうる事ができるし、防御の時には攻撃をもちこたえてこそ敵を打破ることができる。……精神の原子爆弾は即ち人の思想覚悟、人の勇敢さである。物質の原子爆弾に比して更に強く、更に有用である。

「物質の原子爆弾」に対して「精神の原子爆弾」で十分に戦うるといふこの林彪理論は、一見すると無暴の極みのようであるが、実はこの理論は帝国主義国の核恐喝に対してたじろがぬという自信と核攻撃に対しても完全敗北をすることはないという中国の成算を述べたに過ぎない。むしろ大きな犠牲を覚悟してもあくまでも帝国主義国の核攻撃に対しては戦い抜くという決意を表明したものと考へねばならないのである。しかしながら中国がこのように決意した事の裏では二つの大きな問題が討議されたと思われる。一つはソビエトへの核依存であり、他の一つはアメリカ帝国主義の力量の評価の問題である。前者の問題については彭徳懐が対ソ依存を主張したことは既によく知られているが、この意見は国家主権を危くするものとして退けられたのである。既に社会主義建設路線、国際共産主義運動の総路線に対してソビエトとの意見の相違が顕在化しつつあったこ

の時期に、毛沢東を中心とする指導部は核攻撃を受ける危険を犯しても中国の国家主権と自己の総路線を守る道を選んだのである。この選択は決して無暴なものではなく、フルシチョフとは違った独自のアメリカ帝国主義の評価に裏付けられていたと考へることができる。一九六〇年四月に発表された有名な記念碑的論文「レーニン主義万才」はアメリカを中心とした帝国主義国家の力量を次のように評価しているのは特徴的である。

各国人民の自覚が高まり、十分な備えがありさえすれば、社会主義陣営もすでに現代兵器を掌握したという条件のもとで、もしアメリカ帝国主義者またはその他の帝国主義者が原子兵器と熱核兵器の禁止協定の達成を拒み、かつまたあえて、全世界の大反対をかえりみず、いったん原子兵器と熱核兵器をもちいて戦争を敢行するならば、その結果は世界人民の包囲のなかにあるこれらの野獣自身がすみやかに壊滅させられるだけであつて、人類の壊滅などということとは決してあり得ない、と断言できる。

このようにアメリカの力量が著しく低下したが故に核兵器の威力も半減せざるをえないことを言いつつ、他方では「最後のあがきで理性を失い、氣違ひじみた大冒険をしでかす可能性」も忘れてはいない。しかしアメリカ帝国主義が核の威力を借りて世界を思いのままに支配する時代は過ぎ去り、中国を核で攻撃したとしても彼等は決して中国を壊滅させ、支配する力量は持たないというのがこの時の中国指導部の判断であつた、と考へられるのである。このようなアメリカ帝国主義の評価を基礎として対ソ依存と訣別し、独立自主、自力更生の政治路線にふみ

出すとするならば、当然の事として急速な国防力の強化を必要とする。¹³ 対ソ訣別によって完全に彭徳懐路線を葬り去った後に、中国に国防力強化の道として残されているのは毛沢東路線、あの人民解放軍の輝かしい伝統への復帰する道だけである。核競争時代に於ける毛沢東路線の有効性については議論が分れたであろう。しかし最終的には毛沢東路線の有効性を確認することをして党内の合意は成立するのである。「四好中隊運動」は上述してきたような諸問題に対する毛沢東思想による独自の判断の上に立ち、あくまでも帝国主義国と対決し、自らの社会主義建設路線を推進していくための国防力強化の具体的措置として成立する。それは何よりも毛沢東軍事思想に基づくものであるが同時に、当時中国がおかれていた国際的な厳しい情況と危険に賭けつつ原則を守っていこうという党指導部の固い覚悟とに大きく規定されているのである。この運動が烈しい緊張、闘志、禁欲、刻苦奮闘といったものの特徴とするのは当然である。「四好」とはこのような軍隊建設のための指標を提示したものに外ならない。この「四好」の内容について、「一九六一年の国際建設工作要綱」はあらまし次のように規定している。オ一の「政治思想好」は、党の方針政策、軍事委員会の決定指示を適時に末端に伝えることと末端の思想動態を理解し、具体的内容によって毛沢東思想の学習をすすめ、毛沢東思想によって問題を解決していくこと。オ二の「三八作風好」¹⁴は「嚴肅」という原則に結びつけて軍規、風紀の整頓、規則、制度の實行、操作規程の嚴格な順守、「団決」という原則と結びつけて三大民主主義の発揚、五同の實行、人民と同甘同苦、熱情と誠実ある態度で人に接することなど。オ三の「軍事訓練好」では「少而精」

の原則、最も困難な状況から出発する、規則、製度の順守、三分の二以上の幹部が常に下放していること。オ四の「生活管理好」は食事をよくすること、労働と娯楽を結びつけること、文化活動を活発にすること。このような所が「四好」の内容として考えられているのであるが、この四つの指標の中で中心になっているのは言うまでもなく「政治思想」である。林彪は「擄取が解らなくては革命が解らない」と言っているが、政治思想工作の中心はこの「擄取」を理解させ、階級意識を明確化することにおかれている。それは「プロレタリア階級の立場、観点、方法で事物を観察することと事物を処理すること」と言ってもよい。この「プロレタリア階級の立場、観点、方法」を徹底するために人民解放軍は「毛沢東思想の矢によって部隊思想の實際的を射るようすべきである」と林彪が言うように、毛沢東思想の学習を推進する。マルクスでもなくレーニンでもなく、ただ毛沢東のみを学習の対象とした事には人民解放軍の学習運動の大きな特色があるが、しかしその目的とする所は、兵士一人一人を階級闘争を闘いぬけるプロレタリアートの戦士に育成することにあつたのである。「四好」の内容は、まさしくこの「プロレタリアートの立場、観点、方法」を軍隊生活のあらゆる部門、即ち日常工作、軍事訓練、生活のすみずみまで貫徹することを要求したものに外ならない。「四好中隊運動」とはまさしくプロレタリアートの軍隊創造の運動なのである。一九六一年初頭、中国指導部は完全に、徹底的なプロレタリアートの軍隊を以て帝国主義国と対峙する道をふみ出したのである。これは国際的規模での階級闘争を闘いぬこうという決意を秘めた中国の万里の長征の一步であつた。

二

「四好中隊運動」が始った一九六一年当時の人民解放軍がプロレタリアートの軍隊の実質を備えていなかった事は疑いのない事実である。階級制の実施によつて軍内部の空気が荒れてきた事は一九五六年当時から既に言われている所であるが、その後展開された整風運動にもかかわらず、この時になつてもまだ空気が残存したことは、「軍事委員会の工作報告」が次のように報告している。

部隊の管理教育工作は、この数年来政治才一に欠け、指導部はこの問題を十分に重視せず、末端幹部の大多数のものは解放後抜擢されたもので伝統作風が失われた。このため軍閥の残りかすがまだはびこり強制命令、機械的生硬、單純粗暴になり、はなはだしきは人をなぐり罵倒し、兵士の生活や病苦に無関心な現象がかなり普遍的に存在している。

羅瑞卿は部隊を視察した結果、部隊の志気はあらゆる時代に比較して最低の状態にある、と報告している。²³プロレタリアートの軍隊と言うにはあまりにもひどい作風が存在し、志気も必ずしも高くなかつたのである。当然のことながら、それは部隊の思想的混乱の原因がある。羅瑞卿は一九六一年二月の報告の中で兵士の二十八・六％が国内情勢や「三面紅旗」に対して曖昧な見方や誤つた思想を持っている、²⁴と言っているし、一九六一年四月の別の報告は「兵士のうち三十％前後の者は曖昧な認識や誤つた認識をもつていた。五％ほどのものは三面紅旗に反抗

的な感情を抱いていた」と言っている。兵士の気持は相当に混乱しており、彼等の思想は党の統制下から離れつつあつた、と言ふことができる。別の報告には「鉄砲で反党をす²⁵」と公言する不満分子すら生れていることが言われているし、そのような雰囲気²⁷に活動の機会を見出した反革命分子には真剣に対策がこうじられてさえない。人民解放軍の内部は崩壊一步手前というほどではないが、かなりの規模で混乱しており、それが放置されたままの状態になつていたのである。そしてこのような反革命活動や思想的混乱と闘う任務を持つ党組織は下部では殆んど壊滅状態にあつたのである。その状態は「絶対多数の班には一人の黨員もいなかった。絶対多数の小隊には党小組がなく、全軍の中で七千個中隊には党支部が設置されておらず、いくつの中隊はたとえ支部委員会があつても、党支部の骨幹幹部が常に中隊にいないためにぬけがら同然の形式的なものでしかなく²⁸」と報告されている。同報告は又党支部組織が存在している所でも規律が弛緩しきつており、幹部黨員がまっさきに悪事を働き、集団悪事に発展することがあつても誰一人としてそれを摘発し、制止する者はなかつた、と嘆いている。軍隊内における党組織は空洞化し、實質的には壊滅同然であつた、と考えられる。大多数の兵士は未だ社会主義と党に忠誠を誓つているとはいえ、志気は高くなく、内部には相当大きな混乱をかかえており、党組織は空洞化しきつてい、このような人民解放軍を対象として林彪指導下に整風運動が開始されるのである。

整風運動の方針を決定したのは一九六〇年十月の党中央軍事委員会拡大会議である。この会議では「軍隊の政治工作に關す

る決議」(未発表)が採択され、林彪が「四つの第一」⁽³⁰⁾の講演を行つている。基本的工作の方向はこの会議で決定されたと思われるが、これに先立つて六〇年七月には整風運動の基礎作業とも言ふべき軍隊内党組織の整頓工作が始つている。翌年二月まで行われるこの工作は主に党組織の再建と党員隊列の純潔化という二つの方向に沿つて行われている。そして六一一年三月には「全軍の半ば以上の班に党員があり、八十%以上の小隊に党小組が設置され、支部委員会のない中隊には全部支部党委員会が設置された」という状態になり、他方では「全軍の党籍解除者千二百人、候補党員の資格を取り消したものが九百四十人」という形で純潔化が達成され、党組織、指導力、工作作風が大いに改善されるのである。こういう基礎作業の上に最初に全軍的に展開されたのが「両憶三查」運動である。この運動にかかる指導部の意気込みは非常に真剣であつたと思われる。林彪は三年連続災害がもたらした経済的困難に言及しつつ、次のように指示している。

困難が嚴重であればあるほど、それはわれわれの政治思想、想工作を試練する時である。困難が深刻であればあるほど、精神的原子爆弾の威力はますます発揮すべきである。われわれの政治工作は、必ず明年(六一一年)上半期には解決をみるようにしなければならぬ。われわれのどの一人の幹部も、どの一人の党・団員も、必ずこの困難な試練を耐え抜かねばならない。これを要するに、明年上半期は一つの大きな関門だと言えぬ。⁽³²⁾

又総政治部副主任劉志堅は「われわれが今年基層をつかみ、政

治思想を掌握するオーラウンド」であり、「今年の各種の任務を勝利のうちに完成するための、よい思想的基礎を築きあげる」ものと把握し、三分の二以上の幹部を動員して運動にとりくむことを指示している。蘭州軍区で小規模に行われていたものを林彪の指示で全軍的に拡大されたこの「両憶三查」運動は、一九六一一年一月上旬から二月中旬まで集中的に展開される。一般の段よりは次のようなものである。

まずオ一に、兵士たちに旧社会で受けた圧迫や搾取の苦惱を想起させ、その辛酸の根源を掘り下げて、階級意識を呼びさまし、敵と味方とを明確に識別させるようにする手筈を整えた。次いで、現在の生活の安楽さについて語り合つて、その根源を突きとめさせ、過ぎし日の生活と今の生活とを比べて、損得を勘定してみるという方法をとつて、解方後の幸福、とり分け人民公社以後の幸福について大いに語り合わせて、兵士たちが当面の国内情勢について正しい認識を抱くように導いた。こうして、兵士の意識が高まつてきたところで、三查を行った。⁽³³⁾

各地域によつて若干の相違はあるに違いないが大筋はここに述べられたような形で行われたかと思われる。この運動に参加し、体験発表をした英雄人物である雷鋒は大会の様子を日記の中に次のように生々と記している。

昨日私は軍人大会で苦しみを回顧した。会に出席した一千名の戦友と家族は皆私が過去に受けた階級苦と民族苦に同情し、少なからぬ同志は苦しみの涙を流した。この憶苦(苦しみを回顧する)大会は成功した。みんなは深い階級

教育を受けた。心の中の苦痛に耐えきれないで、沢山の同志が自発的に立ち上り、みんなをリードしてスローガンを叫んだ。⁽³⁶⁾

涙と怒りに満ちた大会の雰囲気はこの文章はよく伝えている。このような具体的な、生きた体験談は理論以前の、もつとも直接的な実物教育である。兵士各人はこのような体験談の中から「階級」と「搾取」というものの実態を見る目を始めて開かれるのである。「両憶」の狙いとする所はまさにそこにあつたのであり、以前の運動はこのようにして開かれた目を毛沢東思想の学習と「四好中隊」の創造へと高めていくことを目標としている。「両憶三查」運動とは、階級の立場と観点を明確にし、階級意識を高める契機を作り出す運動であつた、と言うことができる。「三查」については林彪も「時間はきびしく制限しなければならぬ」と言っているようにさほど重点は置かれていないと考えられる。しかし階級の観点を明確化することは、大きな効果を持つものである。運動の成果を次のように自讃するのは決して誇張ではないと受けとれる。

：兵士達は一旦階級観点に目を開くと、多くの思想上のデキモノはたちどころに良くなった。ある兵士は言った。
「苦しみの中の苦しみを知らなくては、幸福の中の幸福は解らない」⁽³⁷⁾ 対比（過去と現在）を勘定しないなら本当に曖昧模糊たるものである。⁽³⁸⁾

「両憶三查」運動の成功以後、これと類似の「生きた教材、生きた方法で形勢を語り、政策を語り、伝統を語る」という運動が各中隊独自で展開された事を人民日報は多く伝えている。老

幹部達による「伝統報告団」「革命伝統故事会」中隊の「宝」を伝えることによって中隊の伝統を新入兵士に伝える運動、革命映画による学習会、人民公社の参観訪問、軍事訓練による解放軍の伝統学習等々である。その試みは多彩であり、さまざまな独創がこらされている。しかし、そのすべてに共通する性格はプロレタリアートの階級観点をしっかり持ち、その工作作風「人民解放軍の伝統を学習することに外ならない。一九六一年の「四好中隊運動」はこの階級の観点の徹底化を中心目標として、その周囲に情勢を語り、政策を学習し、革命的伝統を学ぶという課題が配置されている。という形で進められたと考えられる。だがその成果は目ざましいものがあつた。「四好中隊創造運動を展開して以後、中隊の面貌は深刻に変化した」と言われているし、その具体的な例としては毛沢東思想の学習の高潮、訓練の成績の向上、幹部の愛兵観念と兵士の組織規律性が強まったこと、食事、生活、文化活動がよくなり、活潑化したこと、などがあげられている。そして具体的成果は「全軍で合計五千個余りの四好連隊と四好單位組織が選ばれ、数十万の兵士が五好戰士と神槍手（鉄砲の名手）神砲手（大砲の名手）と技術能手（腕きき）の光栄ある称号を獲得した」と言われるように、軍隊の組織や軍事訓練の中に確かにあらわれているのである。

三

このように展開された「四好中隊運動」を更に一歩前進させたのが一九六一年十月から十一月にかけて開催された全軍政治

工作会議である。この席上林彪は「我軍の建設方向の問題、任務の問題はすでに明確に解決した。現在は一歩進んで工作方法を研究し、改善しなければならぬ」と会議の任務を明らかにしている。この林彪の指示に応えたのが総政治部副主任蕭華の報告「毛沢東思想を指針として中隊の政治工作を立派にやりとげよう⁽⁴³⁾」である。この報告の中で蕭華は「生きた思想をつかむ十条の経験（以下「十条の経験」と略称する）と呼ばれる原則を明らかにしている。

- ① 毛主席の著作を活学活用する。
- ② 階級教育から着手する。
- ③ 実際から出発し頭をつかむ。（上級の政策指示と中隊の思想状態と実際問題をつかむ）
- ④ 糸口をつかみ、工作を前で行う。
- ⑤ 説得教育を堅持し、理を以って人を従わせる。
- ⑥ 多数の水準から出発し次第に高める。
- ⑦ 思想教育運動と日常性の教育を結合する。
- ⑧ 一人一人が思想工作を行う。
- ⑨ 思想先導と実際問題の解決に注意することを結合する。
- ⑩ 生きた教材、生きた方法を運用する。

この「十条の経験」がさし示しているものは毛沢東思想をあらゆる場合に、あらゆる方法で兵士に教育する方法である。例えばその④項「糸口をつかみ……」という工作方法は工作の預見性の重視を説いたものであるが、その工作の実際は解放軍の幹部と思われる人が次のように説明している。ある同志が射撃練習場で三十分も練習しないのに「何時だ」と聞いたり、或いは農作業で「こんなに耕したのに、まだ飯は始まらないのか」と言ったり、戦備の築城中に「毎日こんなに仕事をしても朝飯前にきれいさっぱりやる仕事のできにも及ばない」といつたりするのを聞けば、その言葉が出てくる原因を分析しなければならぬ。このような言葉の裏には毎日の練習を煩わしいと思う気

持や労働態度上の問題や戦備工作に対するあせりや怠け心が潜んでいる。このような思想上の「糸口」は拡大しない前に、よい時機を見はからって工作しなければならぬ。それには情勢の教育を反復して進め、生産と戦備の関係を明らかに話し、戦備観念を樹立させ、高度な警戒心を持たせなければならぬ。そうすると兵士には自然と積極性と自覚性が生れてくる、というのである。又⑧の「一人一人が……」は各人が思想工作の対象であると共に思想工作の力であることを言ったものであるが、それは次のように説明されている。「広大な大衆を動員して思想互助、相互督促、相互激励、相互批評教育を進め、皆を立派な上にも更に立派にする、これこそ一人一人が思想工作をする」ことの主要精神のありかたである⁽⁴⁵⁾。

このように見えてくると「十条の経験」が要求していることは、毛沢東思想学習の驚異的な徹底性であることが解る。幹部が兵士を教育するだけではなく、幹部、兵士の各人があらゆる機会に、実際問題、生きた教材を利用して、お互いに教育、学習し合うのである。生活の全体が毛沢東思想の学習であり、その実践であるような、そのような生活集団としての軍隊建設を要求している、と考えられるのである。このような運動を更に徹底して進めるために総政治部は六二年四月に「機関の中隊指導を改善する七條の措置⁽⁴⁶⁾」を指示する。この指示は中隊の負担を減らし、中隊の工作の主動性を拡大すると共に、幹部に下放し、調査研究を進めることを要求している。運動に解放軍の総力が投入されていることをこの指示は語っている。このようにして非常な徹底性を特徴として推進された毛沢東思想学習運動は確実

に成果を収めたと言うことができる。その成果こそ六三年初めに全中国で紹介された英雄人物「雷鋒」であり、模範的中隊「南京路上好八連」である。これ等の典型が輩出し得たことは、運動が無数の無名な英雄を生んだことを示している。「四好中隊運動」の最初の成果としての「南京路上好八連」を特徴づけるものは、解放区時代そのままの刻苦奮闘、克勤克儉（努力して節約する）の生活態度と作風である。彼等は資本主義の牙城、上海に進駐して十四年、全く資本主義的気風に犯されず、あらゆる誘惑にも敗けずに解放区の作風を持続するのである。一足の靴下の底を何度もとりかえてはき続ける、或は、修理を重ねて一着の服を十年にわたって着続ける、水道があるのに使わないうで井戸を使う、電車に乗らない、荒地を開墾して自給自足の生活をするなどの素朴質素な生活を続けるのである。そして彼らは言うのである。「我々が一尺の布を少く使えば、人民が一尺多く着ることができる。今日我々がよくないものを着るのは、明日もつと立派なものを着るためだ。」共産主義は天上から降ってはこない。皆の刻苦する労働によって創造しなければならぬ。それは又各人の小さな節約にもよらねばならない。⁽⁴⁷⁾

彼等の日常生活に於ける驚くべき徹底した節約や超人的とも思える刻苦奮闘は、このような共産主義者としての自覚に支えられた自発的行為なのである。だから「最も根本的な原因は、中隊の同志が毛沢東思想を基準として堅持し、自己の思想を改造し、プロレタリア階級の世界観を確立し、自己の行動を指導したことにある」と言うことは正確である。だがその事よりもより重要なことは、日常生活のすみずみ、行動のはしはしまで

も共産主義者としての自覚を徹底させた人間集団を生みだすためには、徹底した工作が必要であった、ということである。解放軍総政治部は「好八連」の政治思想工作の経験を八條に要約して、全軍に学ぶように呼びかけているが、この八條が示すものは「十條の経験」の実践に外ならない。「好八連」とは「十條の経験」がさし示す工作方向が生み出した一つの成果だと考えられるのである。徹底した粘り強い日常的工作の中からしか、「堅忍不拔」な精神、刻苦奮闘の作風は生れはしないのである。

一九六三年の運動目標は中隊規模の次元に抜けて設定されてくる。一九六三年二月に全軍政治工作会议が挙行され総政治部副主任蕭華が二年間にわたる「四好中隊運動」の経験を総括報告する。この報告は「中隊建設の十二條の基本経験」(以下「十二條の経験」と略称する)と呼ばれるようになるものであるがこの中に六三年の工作方向が明確に指示されている。「十二條の経験」の大目標が「四好中隊運動」を更に推し進めることにあるの言うまでもないことであるが、この報告は「四好」の内容を更に細部にわたって説明し、指示した部分と具体的指導方法、工作方法を述べた部分から成っている。その内容には特別に新しいものはないが、工作目標が細かく、具体的に指示されていることが特徴である。それは「四好中隊運動」が軌道に乗り、中隊の中にしつかりと根を下し、兵士の日常とびつたりくつついていくことを反映していると思われる。一九六三年の運動はこの工作方向に沿いつつ、「雷鋒」「好八連」の学習運動を中心に熱気をはらんで展開される。解放軍報社説も「雷鋒、南京路上好八連等を学習する活動は深遠な影響を生みだし

た」と言いつつ、六三年の成果を「部隊の思想面貌に深刻な変化が生じ、階級と階級闘争の観点は更に明確化し、プロレタリア階級の闘志は更に高まり、戦備観念は普遍的に強化され、刻苦奮闘の革命精神と共產主義の高尚な品德は大いに高揚し、英雄模範、好人好事は次から次へとつきることがない」と自信を持って断言する所までになっている。この段階までくれば「工作の重点を思想上に移し、工作方法を機関から中隊へ、上層から下層に移す⁵³」ということを目標にして開始された「四好中隊運動」は一応の所期の成果を取めた、と言うことができる。一九六四年の全軍政治工作会議は一月に北京で挙行されるが、ここでは従来の運動を更に前進させることが決議されると共に、新たに幹部教育の問題、上部機関の建設、指導作風と工作方法の改善が大きく問題としてとりあげられている。この事は「四好連隊運動」が初期の段階を終り、より高次な段階へ進んだことを示すものだと考えられる。運動は六三年を以て初期のサイクルを完結するのである。

四

以上のように追求してきた「毛沢東思想」によって軍隊を建設するという「四好中隊運動」はその後、社会主義教育運動、文化大革命と続く思想整風運動、革命運動の原型を作りあげたという意味を持っている。これ等の革命運動は「四好中隊運動」と同様に毛沢東思想も徹底化することを目的としており、如何にして毛沢東思想を人々の意識の中に確立し毛沢東思想によって世界を変革していくのか、ということ为主要な課題としてい

る。従ってこれ等の運動は、「四好中隊運動」が創造した毛沢東思想の学習方法から多くの影響を受けざるをえなかったのである。このような意味で「四好中隊運動」の毛沢東思想学習方法が文化大革命に発展していく思想整風運動の中で持つ意味は大きく、「四好中隊運動」を毛沢東思想の学習方法の問題として考察することは、文化大革命、そして現在までも尚継続している諸改革を理解するためには不可欠の作業である、と考えられる。

解放軍の毛沢東思想学習運動が「両憶三查」という体験教育から始まっていることは、この運動が兵士の自発性の上でのみ初めて成立する大衆運動であることを示している重要である。この「両憶三查」運動は、兵士達が旧社会で受けた悲惨な体験の持つ意味を考えることで單なる怒りにしか過ぎぬ感情を階級意識に昇華し、プロレタリアートの世界観にまで高めていく作業を、兵士集団が自発的に行うことを狙いとしていた。旧社会で苦しい体験を経ている人間ほど、このような大衆的思想教育運動によって激しい闘志を燃やし、貧しく苦しんでいる人々への連帯の意識を固め、痛ましいまでの自己犠牲の精神で工作にとりくむことは雷鋒の日記が示している通りである。新しい世界観の形成はこのように人間を変革していく。この間にあって毛沢東思想がはたした役割は、彼等に自己の体験の意味を教え、そのような体験を持つ人間にふさわしい世界観の形成へと導く、導きの糸としてのそれであって、毛沢東思想の学習は彼等にとっては自己に最もふさわしい行動形態の探求であり、自己形成そのものであった、と考えられる。階級と思想の美しい調和をそ

の中に見ることが出来る。続いて起るのが「毛沢東思想の活学活用」であるが、これは自己の体験のみならず、当面している実際問題の解決を通して思想を理解し、体得すると共に実践していく能力を身につけていこうという運動である。この「活学活用」の運動は「十条の経験」が要求したような徹底した工作によって驚くべき成果を収めたことは前述した通りであるが、それは、すべてプロレタリアートの世界観、共産主義思想としての毛沢東思想の力によるものであった。「活学活用」はすぐれた思想学習の方法であるのみならず、軍隊にとつては戦闘力増強の方法であり、軍隊を共産主義的集団として建設するためにも、非常に有効な方法であることが実証されたのである。その事はこの運動は軍隊という枠をとり払えば「毛沢東思想の活学活用」という運動は、そのまま革命運動になり得ることを示しているのである。「四好連隊運動」の最大の成果は、「毛沢東思想の活学活用」という事が如何に大きな力を発揮するものであるか、革命運動として如何に有効なものであるかを実証した事にあると考えられる。文化大革命に到るまでの諸運動は、基本的にはこの方法に学び、この方法によって推進されている。「毛沢東思想の活学活用」が非常に大きな現実的成果をもたらすものであるならば、この運動の中から「毛主席著作の学習は、問題を持って学び、活学活用し、学ぶことと用いることを結合し、急いで用いるものを先に学び、すぐ効果が現われるようにしなければならぬ」という実用主義的傾向が生長してくるのも一種の必然である。この傾向が「活学活用」というものが持っている一つの側面を代表していることは疑いえない。しかし、

この傾向が同時に毛沢東思想をプロレタリアートの世界観ではなく、現実処理の方法に歪小化していることも否めない。このような実用主義的傾向と並行しつつ毛沢東思想を絶対化する傾向も又生長してくる。ただ毛沢東思想の学習さえすれば、すべての問題は解決されるといふ安易な思考である。このような思考の怠情を蕭華の次のような言葉の中に発見できる。彼は運動の目的を「毛沢東思想で全体将兵の頭脳を武装し、彼等をして自覚的に毛沢東同志の指示に従って行動せしめることである」と言った後、続けて「経験は繰り返し証明している。断固として毛沢東思想によって事をなせば我々の事業を発展させ、勝利させることができる。これに反して、少しでも毛沢東思想を離れるならば、主観上工作を立派にやる積りでも、我々の事業を挫折、あるいは失敗に落し入れられる。毛沢東思想は、過去、現在と将来を問わず我軍のすべての工作の唯一の正確な指針である」と言う。この思考が示しているのは「活学活用」でなく、毛沢東思想の絶対化である。一九六三年には非常に大きくなっている。「毛主席の書を読み、毛主席の言葉を聞き、毛主席の指示に従って仕事をし、毛主席の立派な戰士となろう」というスローガンが、一九六三年の「四好中隊運動」をリードしているが、このスローガンは毛沢東思想を絶対化する傾向を促進こそすれ、決してそれにブレーキをかける性質のものではない。雷鋒の「問題―学習―実践―総括」「好八連の、一読、二議（討論）三对照、四行動」というような毛沢東思想の教条化を防ぐすぐれた学習方法が一方では堅持されているが、他方では觀念化の道―毛沢東思想絶対化も確かに進行していたのである。

そして実用主義的傾向と毛沢東思想絶対化の傾向が結びつく時、現実と思想との関係を完全に転倒した毛沢東思想の名による観念論が生れるであろう。毛沢東思想の名においてすべての現実問題を裁断していく乱暴な教条主義である。このような教条主義が生長していったことは、文革の過程で楊成武が「毛沢東思想の絶対的權威」を打ち立てようと主張したことによって暴露された通りである。だがこのような諸偏向もそれぞれの有効性のある限度の中で持っていたことは注目されねばならない。特に思想闘争では、ある種の教条主義的態度の方が反対派には攻撃力を持つことがあるものである。「四好中隊運動」では、これらの傾向が未分化のまま、毛沢東思想の「活学活用」という運動で一つに統一されていたのである。

「毛沢東思想絶対化」の傾向が生長したことは、「四好中隊運動」が「信念」を必要とするものであったという事情と深くかわっている。大きな犠牲も覚悟しつつ、独力で帝國主義国と対峙する戦略の上に成立したこの運動は、緊張と自己犠牲、刻苦奮闘の精神を必須の條件とするものであったが、同時にそれは指導者も指導思想の大きな權威を打ち立てることを必要とするものでもあった。指導者と指導理論への信頼なくしては不敗の信念は生まれず、不敗の信念なくしては運動は成立しないのだ。「四好中隊運動」においては毛沢東と毛沢東思想こそは、權威そのものであり、兵士に不敗の信念を与える源泉であったのである。このような毛沢東思想の「役割」の中にすでに「絶対化」の要因は内在しているのである。従って中国の当面する困難が減少し、世界の緊張が緩和すれば、毛沢東思想を「絶対化」す

る必要性は消滅するのであり、毛沢東思想「絶対化」が現実適應力のない観念論であることも又暴露されざるをえないのである。そして共產主義思想が超人的な節約や自己犠牲をその属性として現象することもなくなるであろう。人々はもつと開かれた心で毛沢東思想に対する事が可能になるのである。そのようにして毛沢東思想を相対化する視点を獲得した時、「毛沢東思想の活学活用」には新しい広大な地平線が開けるのである。現在の中国は自己の力量を増大させることによって、そのような可能性を獲得しつつあるように見える。現在、マルクス・レーニン・スターリンの著作が学習されていることは、「四好中隊運動」が切開いた「毛沢東思想の活学活用」の世界を既に越えたことを示している。

註

- (1) 關於連隊政治工作幾個名詞簡釋 人民日報一九六四年一月二〇日
——(解放軍報) 編輯部答讀者問
- (2) 彭德懷「勝利完成軍事工作的光榮任務」 人民日報一九五六年九月二〇日
- (3) 朱德「人民軍隊、人民戰爭」 人民日報一九五八年八月一日
- (4) 毛沢東「論持久戰」 毛沢東選集第二卷 四六七頁
- (5) 林彪「高舉黨的總路線和毛沢東軍事思想的紅旗闊步前進」 人民日報一九五九年九月三〇日
- (6) 範戈「論軍隊政治工作的方向」 人民日報一九六一年七月二八日
- (7) 毛沢東「抗日戰爭勝利後的時局和我們的方向」 毛沢東選集第四卷一二三三頁

(8) 深入連隊加強思想工作 人民日報一九六〇年一月八日

— 林彪元師談軍隊政治工作的中心 —

(9) 新島淳良「プロレタリア階級文化大革命」青年出版社、一九六二年版三

一頁には、その事情が次のように書かれているのは、参考になる。

「さらにまた彭徳懷は一九五五年、一九五七年、一九五九年の三回にわたってソ連を訪問して、フルシチョフのままで、「三つの赤旗」を批判し、中ソ合同艦隊案、雲南省にソ連の基地をつくらせる案などを相談している。」

(10) 中ソ論争での中国論文、ソ連共産党指導部と、われわれとの意見の相違の由来と発展(国際共産主義運動の総路線についての論戦、北京外交出版社、一九六五版、八五頁)は次のように述べている。

一九五八年ソ連共産党指導部は、軍事面から中国を制しようとする理不尽な要求をだしたが、中国政府の正当な断固とした拒絶にあった。

(11) 「列寧主義万才」 紅旗一九六〇年第八号

(12) 軍事委員会訓練会議における葉劍英同志の講話

本郷賢一訳「工作通訊抄」時事通信社、昭和四五年版三四六頁この資料の出所はアメリカのようであるが内容は信頼することができると判断する。利用は慎重を期さねばならないが、中国側の資料という立場で以下利用していきたい。

(13) 「国防建設工作要綱」(同前四〇—五三頁)

ここでは「四好中隊」の建設以外に、幹部の思想教育、編制、装備の強化、勤儉建軍、作戦準備、民兵強化、などがとりあげられている。

(14) 同前

(15) 「三八作風」は人民解放軍の行動基準であるが、内容は次の通りである。

1. 確固とした正確な政治的方向、2. 苦しみにたえ質素な工作作風、
3. 敏活で機動的な戦略戦術、團結、慎重、嚴肅、活潑

(16) 五同：將校と兵士が食事、居住、学習、労働、娯楽の五つを共にする。

(17) (5) に同じ

(18) 人民日報社論「永遠保持艱苦奮鬥的革命精神」

人民日報一九六三年五月八日

(19) 一九六一年の政治思想工作に関する林彪国防部長の数点指示、

(12) に同じ 七九頁

二

(20) 譚政「建軍新階段中政治工作的若干問題」

人民手冊一九五七年版大公報社

この報告にくわしく内部の空氣がのべられている。

(21) 中屋敷宏「整風運動の研究」 筑紫女学園短大、紀要第六号

(22) 軍事委員会の工作報告 (12) に同じ 五六—五七頁

(23) 羅瑞卿の報告 同前 一〇二頁

(24) 同前

(25) 「向儻三查」教育運動についての總政治部總括報告 同前 一九一頁

(26) 第四〇三連隊第一大隊第一中隊の調査報告 同前 一三一頁

(27) 社会反革命鎮圧、内部肅清運動の指示 同前 九一頁

(28) 總政治部の党中央委員会ならびに軍事委員会に対する總括報告

(29) 同前 同前 二〇九頁

(30) 「武器と人間との関係では人の要素が第一、各種の工作与政治工作との関係では、政治工作が第一、政治工作の中の各種の工作与思想工作の関係

では、思想工作が第一、本の思想と生きた思想の関係では、生きた思想が第一」

(31) (28) に同じ

(32) 同前

(33) (19) に同じ

(34) 劉志堅副主任の一月七日の電話会議における訓示要旨、同前一七七頁

(35) (23) に同じ

(36) 雷鋒日記(増訂本)

香港朝陽出版社一九六九年版四一頁

(37) (34) 中の引用による。

(38) 唐平鐸「關於軍隊基層建設工作」 人民日報一九六二年五月一五日

(39) 解放軍政治工作靈活深入 人民日報一九六一年二月二九日

(40) 促進四好連隊運動進第一步鞏固指高 人民日報一九六二年四月二九日

(41) 同前

三

(42) 解放軍報社論「認真研究和改進工作方法」 人民日報一九六二年二月三日

(43) 蕭華「以毛沢東思想為指針作好連隊政治工作」 人民日報一九六一年二月一五日

(44) 郭雲昆「抓住苗頭把工作做在前面」 解放軍報一九六二年七月一四日、四個

第一」 上海人民出版社一九六五年に所収

(45) 武烽火「人人做思想工作」 解放軍報一九六二年六月一〇日同前

(46) (40) に同じ

(47) 解放軍報記者「艱苦作風、代代相傳」 解放軍報一九六三年三月三〇日四好

連隊上海人民出版社一九六四年版に所収

(48) (18) に同じ

(49) 号召全軍學習好八連政治思想工作經驗 人民日報一九六三年五月一二日

- ①問題を持って毛主席の著作を学ぶ、②生きた教材を用いて、階級教育と
- 伝統教育を行う、③糸口をつかみ工作を前面で行う、④好人好事を表彰
- し、正面教育を進めることを堅持する、⑤指導分子の働きを發揮する、

⑥党支部は幹部を立派に管理せねばならない、⑦立派に大衆工作を行う、

⑧正確に名譽に対処する、

(50) 同前

(51) 蕭華「目前部隊政治工作建設的幾個問題」 人民日報一九六四年一月二二日

(52) 解放軍放社論摘要「更高地拳毛沢東思想偉大紅旗把創四好連隊的工作做得

好上加好」

人民日報一九六四年一月四日

(53) (8) に同じ

(54) (51) に同じ

四

(55) (51) の中に引用されている。

(56) 蕭華「以毛沢東思想為指針進行活的思想教育」

「紅旗」一九六三年第一五期

(57) (52) に同じ

(58) (51) に同じ

(59) 楊成武「大樹特樹偉大統帥毛主席的絕對權威大樹特樹偉大的毛沢東思想的絕

對權威——徹底清算羅瑞卿反對毛主席反對毛沢東思想的滔天罪行」紅旗一九

六七年第一六期